

今年生まれる孫のために

ライト工業株式会社（東京電機大学 非常勤講師） フェロー会員 中澤 亨

1, 始めに

土木技術者には顔がないと言われる。土木工事では、ものを作るが、皆で作ったのだという意識が強い。曾野綾子の小説「無名碑」で、主人公三雲竜起に、妻容子との会話で、「僕の仕事は一生どんないい仕事をして個人の名前は残らない」と言わせている。自分を殺し世のため、他人のため、組織のための人生が美しく書かれており感動を生む。しかし50年先を想像したとき、これでよいのだろうか疑問がわく。そこで、土木界の在りたい姿と、なっているだろう姿を描いてみて、将来に希望を見出し、今後の活動に繋げたい。

2, 活躍の場は世界

我が国は、戦後の貧困から国民の努力で、国土は整備され人の暮らしも裕福になった。しかし、この過去50年の国土整備の発展が、今後50年続くとは誰も思わない。発展途上の活動は希望に燃え明るいが、後退局面の活動は意気あがらず悲しいのは、何事に依らず同様である。

昨今の土木界は、国内プロジェクトの減少に供給体制の縮小が追いつかず、ミスマッチを来たし歪みが生じている。同じ状況が1980年代に一度あった。やはりその時「建設業冬の時代」と称し「構造不況」と診断していた。建設業界の解決策は「世界戦略」、「多角化」、「新規事業」であった。しかしこの時は、米国の外圧による構造協議で、「内需拡大」、「障壁の排除」が要求され日本政府が応じ、結果的にバブル景気を来した。その結果、建設業界は空前の盛況状態になり、冬の時代と構造不況とを忘れてしまった。

21世紀の初頭の今再び、同じ事態に直面している。土木界の本質は何も異なっていない。同じく「内需拡大」、「障壁の排除」＝「規制緩和」であり、異なるのは、「政府財政の破綻」の深刻さと「国土整備」の充足である。土木技術者の活躍の場を考えると、最早、この国のプロジェクトのみを対象にする時代は去っている。目を国外に転じて、世界で活躍する時代が来たのである。世界を活躍の場として捕らえなければ、日本人土木技術者の生き行く道はなくなってしまう。今なお活躍中の技術者も今から社会に羽ばたこうとしている学生もである。

嘗てのオランダやイギリスのように、自分の技術を世界に展開するしかない。彼らは自国内には彼ら自身が生きのびれるプロジェクトはないのである。

3, 国内も世界の部分

視野を世界に広げる時、日本国はいかにも特殊である。

まず、英語が通じない。公共工事の使用言語は特別案件をのぞいて全部日本語である。

次に、設計者が発注者である。そのために、基準・指針が発注者毎にことなり、統一基準がないに等しい。日本をローカルと位置づければ、確かにローカルプロジェクトにはローカル業者にローカル言語は理解できる。しかし、日本が抱えているプロジェクトは、世界的に見てもビッグプロジェクトでありローカルプロジェクトとは言えない。

ローカルな閉じた空間で政官業がビッグプロジェクトを処理しているからこそ永年の内に歪みが出てくるのは必然。この悪習慣の解決策に「国内の国際化」即ち、国際入札を増加することが有用であろう。併せて、国内プロジェクトが世界に通用し、世界へ繋がる出発点として、国内でも技術者が活躍できる新分野を創出できる。

キーワード：教育 マネジメント 公共工事 国際化 土木技術者 資格制度

連絡先（住所：東京都千代田区九段北 4-2-35・電話：03-3265-2551・FAX：03-3265-2678）

4、大学の土木の講義は英語

土木技術者が、世界のプロジェクトに目を向け、また世界の一部として国内プロジェクトに立ち向かうとき、世界に通用する技術を身につけていなければならない。その重要な要素に「言葉」がある。今や意思疎通の世界共通語は英語にも拘わらず、日本だけが、自国語に拘り、技術用語、契約用語全て日本語なのである。日本人の主張である「日本に來たければ日本語を勉強して來い」は、一種の鎖国である。このままでは、世界に孤立し、閉じた世界のみでしか繁榮出来なくなってしまう。明治の先輩は、海外に多くを学びそれを全て日本語に翻訳した。その結果、現在の学者も学生も社会人の土木技術者も英語の必要性を感じなくなってしまった。

専門書、専門誌、論文、報告文も全て日本語で事足りるのである。

しかし、最早日本の土木界の鎖国状態は許されない。内から門戸を開き、近隣諸国のエンジニアと交流を密にし、プロジェクトをも含めて問題の共有化と解決策を図る専門集団として生きる必要がある。そのための必須条件が「英語」である。世界に通用する土木技術者を輩出するために、大学の授業は、英語主体にして「言葉」不自由の理由で世界に羽ばたくのを躊躇しないようにしよう。大学に呼応して、土木学会の会誌、論文、基準類は、原則英語として例外的に日本語とするくらいの努力が必要である。

5、土木技術者の個と資格制度

個人の成果と責任を認めないのは、日本古来の風土故なのだろうか。建築界はそうではない。

土木界では、明治に始まる歴史的な、役人の無誤謬性と民間の不信頼から来ている論理だと思う。公共工事の場合、設計者が発注者で施工の監理監督も発注者である現行の仕組みでは、個人の存在を認めていない。今までの官指導の体制は、追いつけ追い越せの時代に在っては、効率的に機能し、国土建設に大いに貢献した。しかし今後、世界で土木技術者が活躍することを標榜する場合、この日本独特の仕組みは通用しない。個の存在がプロジェクトを完遂する思想と、技術者としての個の高まりと責任が要望される。

我が国でも、ここ数年来新たな改革が出てきている。技術士制度の改正、APEC エンジニアの登録制度、土木学科の土木技術者資格制度等の新設である。

我々土木技術者自身は、この資格を積極的に取得し世界で活躍し、世界にその実力を認知させることが資格制度を生かすことになり、強いては日本の土木技術者が世界に通用ようになる。

6、おわりに

50年後を考えると、今年生まれる孫が50才になり、重鎮の年代になっている。

18才で進路を選ぶとき土木を選ぶだろうか。卒業したとき活躍の場は在るであろうか。

また、息子夫婦が子供に土木も道を進めるだろうか。そのための教育はどうするだろう。などと考えると、土木界改革の時間はもうないことに気が付き、啞然とする。

土木の世界での活躍を希望した場合に、日本の大学で良いのだろうか、外国の大学で学び世界で活躍するコースの方が本人のためではないか。

などと考えるとき、我々自身の改革も直ぐスタートしなければならないことに気が付いた。

<参考文献> 曾野綾子：無銘碑

土木学会誌：Vol.86, October 2001 特集 土木と建築